井伏鱒二

井伏鱒二

新潮社版

日本文学全集 22

井伏鱒二

発行／1967年9月15日　十一刷／1969年9月25日
発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代)　振替東京808　郵便番号162
印刷所／二光印刷株式会社　製本所／大進堂製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社　製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1967

目次

山椒魚　七
鯉　一五
夜ふけと梅の花　二一
朽助のいる谷間　三三
炭鉱地帯病院　五九
屋根の上のサワン　六九
休憩時間　七五
丹下氏邸　八三
川　九七

女人来訪　一三三
喪章のついている心懐　一四九
青ガ島大概記　一六一
さざなみ軍記　一八三
へんろう宿　二七一
御神火　二七七
鐘供養の日　三二一
追剥の話　三二九
白毛　三三五
遥拝隊長　三四七
丑寅爺さん　三七一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

開墾村の与作　三九一
＊
駅前旅館　四〇五
＊
御隠居さん　五二五
リンドウの花　五三七

注解　五四七
年譜　五五五
解説　中村光夫　五六九

井伏鱒二

山椒魚（さんしょううお）

山椒魚は悲しんだ。

彼は彼の棲家である岩屋から外に出てみようとしたのであるが、頭が出口につかえて外に出ることができなかったのである。今は最早、彼にとっては永遠の棲家である岩屋は、出入口のところがそんなに狭かった。そして、ほの暗かった。強いて出て行こうとこころみると、彼の頭は出入口を塞ぐコロップの栓となるにすぎなくて、それはまる二年の間に彼の体が発育した証拠にこそはなったが、彼を狼狽させ且つ悲しませるには十分であったのだ。

「何たる失策であることか！」

彼は岩屋のなかを許されるかぎり広く泳ぎまわってみようとした。人々は思いぞ屈せし場合、部屋のなかを屡々こんな工合に歩きまわるものである。けれど山椒魚の棲家は、泳ぎまわるべくあまりに広くなかった。彼は体を前後左右に動かすことができただけである。その結果、岩屋の壁は水あかにまみれて滑かに感触され、彼は彼自身の背中や尻尾や腹に、ついに苔が生えてしまったと信じた。彼は深い嘆息をもらしたが、あたかも一つの決心がついたかのごとく呟いた。

「いよいよ出られないというならば、俺にも相当な考えがあるんだ」

しかし彼に何一つとしてうまい考えがある道理はなかったのである。

岩屋の天井には、杉苔と銭苔とが密生して、銭苔は緑色の鱗でもって地所とり（小児の遊戯の一種）の形式で繁殖し、杉苔は最も細く且つ紅色の花柄の尖端に、可憐な花を咲かせた。可憐な花は可憐な実を結び、それは隠花植物の種子散布の法則通り、間もなく花粉を散らしはじめた。

山椒魚は、杉苔や銭苔を眺めることを好まなかった。寧ろそれ等を疎（うと）んじさえした。杉苔の花粉はしきりに岩屋のなかの水面に散ったので、彼は自分の住家

の水が汚れてしまうと信じたからである。剰え岩や天井の凹みには、一群ずつの黴さえも生えた。黴は何と愚かな習性を持っていたことであろう。常に消えたり生えたりして、絶対に繁殖して行こうとする意志はないかのようであった。山椒魚は岩屋の出入口に顔をくっつけて、岩屋の外の光景を眺めることを好んだのである。ほの暗い場所から明るい場所をのぞき見することは、これは興味深いことではないか。そして小さな窓からのぞき見するときほど、常に多くの物を見ることはできないのである。

谷川というものは、滅茶々々な急流となって流れ去ったり、意外なところで大きな淀みをつくっているものらしい。山椒魚は岩屋の出入口から、谷川の大きな淀みを眺めることができた。そこで水底に生えた一叢の藻が朗かな発育を遂げて、一本ずつの細い茎でもって水底から水面まで一直線に伸びていた。そして水面に達すると突然その発育を中止して、水面から空中に藻の花をのぞかせているのである。多くの目高達は、藻の茎の間を泳ぎぬけることを好んだらしく、彼等は茎の林のなかに群をつくって、互いに流れに押し流されまいと努力した。そして彼等の一群は右によろめいたり左によろめいたりして、彼等のうちの或る一ぴきが誤って左によろめくと、他の多くのものは他のものに後れまいとして一せいに左によろめいた。若し或る一ぴきが藻の茎に邪魔されて右によろめかなければならなかったとすれば、他の多くの小魚達はことごとく、ここを先途と右によろめくのである。それ故、彼等のうちの或る一ぴきだけが、他の多くの仲間から自由に遁走して行くことは甚だ困難であるらしかった。

山椒魚はこれ等の小魚達を眺めながら、彼等を嘲笑してしまった。

「なんという不自由千万な奴等であろう！」

淀みの水面は絶えず緩慢な渦を描いていた。それは水面に散った一片の白い花弁によって証明できるであろう。白い花弁は淀みの水面に広く円周を描きながら、その円周を次第に小さくして行った。そして速力をはやめた。最後に、極めて小さな円周を描いたが、その円周の中心点に於て、花弁自体は水のなかに消えてなくなった。

山椒魚は今にも目がくらみそうだと呟いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

或る夜、一ぴきの小蝦が岩屋のなかへまぎれ込んだ。この小動物は今や産卵期のまっただなかにあるらしく、透明な腹部一ぱいに恰も雀の稗草の種子に似た卵を抱えて、岩壁にすがりついた。そうして細長いその終りを見届けることができないように消えている触手をふり動かしていたが、いかなる量見であるか彼は岩壁から跳びのき、二三回ほど巧みな宙返りをこころみて、今度は山椒魚の横っ腹にすがりついた。

山椒魚は小蝦がそこで何をしているのか、ふりむいて見てやりたい衝動を覚えたが、彼は我慢した。ほんの少しでも彼が体を動かせば、この小動物は驚いて逃げ去ってしまったであろう。

「だが、このみもちの虫けら同然のやつは、一たいことで何をしているのだろう?」

この一ぴきの蝦は山椒魚の横腹を岩石だと思い込んで、そこに卵を産みつけていたのに相違ない。さもなければ、何か一生懸命に物思いに耽っていたのであろう。

山椒魚は得意げに言った。

「くったくしたり物思いに耽ったりするやつは、莫迦だよ」

彼はどうしても岩屋の外に出なくてはならないと決心した。いつまでも考え込んでいるほど愚かなことはないではないか。今は冗談ごとの場合ではないのである。

彼は全身の力を込めて岩屋の出口に突進した。けれど彼の頭は出口の穴につかえて、そこに厳しくコロップの栓をつめる結果に終ってしまった。それ故、コロップを抜くためには、彼は再び全身の力を込めて、うしろに身を退かなければならなかったのである。

この騒ぎのため、岩屋のなかではおびただしく水が汚れ、小蝦の狼狽といっては並たいていではなかった。けれど小蝦は、彼が岩石であろうと信じていた棍棒の一端が、いきなりコロップの栓となったり抜けたりした光景に、ひどく失笑してしまった。全く蝦くらい濁った水のなかでよく笑う生物はいないのである。

山椒魚は再びこころみた。それは再び徒労に終った。何としても彼の頭は穴につかえたのである。

彼の目から涙がながれた。

「ああ神様！　あなたはなさけないことをなさいます。たった二年間ほど私がうっかりしていたのに、その罰として、一生涯この窖に私を閉じこめてしまうとは横暴であります。私は今にも気が狂いそうです」

諸君は、発狂した山椒魚を見たことはないであろうが、この山椒魚に幾らかその傾向がなかったとは誰がいえよう。諸君は、この山椒魚を嘲笑してはいけない。すでに彼が飽きるほど暗黒の浴槽につかりすぎて、最早がまんがならないでいるのを、諒解してやらなければならない。いかなる癲癇病者も、自分の幽閉されている部屋から解放してもらいたいと絶えず願っているではないか。最も人間嫌いな囚人でさえも、これと同じことを欲しているではないか。

「ああ神様、どうして私だけがこんなにやくざな身の上でなければならないのです？」

岩屋の外では、水面に大小二ひきの水すましが遊んでいた。彼等は小なるものが大なるものの背中に乗っかり、彼等は唐突な蛙の出現に驚かされて、出鱈目に直線を折りまげた形に逃げまわった。蛙は水底から水面にむかって勢いよく律をつくって突進したが、その三角形の鼻先を空中に現わすと、水底にむかって再び突進したのである。

山椒魚はこれ等の活発な動作と光景とを感激の瞳で眺めていたが、やがて彼は自分を感動させるものから、寧ろ目を避けた方がいいということに気がついた。彼は目を閉じてみた。悲しかった。彼は彼自身のことを譬えばブリキの切屑であると思ったのである。

誰しも自分自身をあまり愚かな言葉で譬えてみることは好まないであろう。ただ不幸にその心をかきむしられる者のみが、自分自身はブリキの切屑だなどと考えてみる。たしかに彼等は深くふところ手をして物思いに耽ったり、手ににじんだ汗をチョッキの胴で拭ったりして、彼等ほど各々好みのままの恰好をしがちなものはないのである。

山椒魚は閉じた目蓋を開こうとしなかった。何となれば、彼には目蓋を開いたり閉じたりする自由とその可能とが与えられていただけであったからなのだ。

その結果、彼の目蓋のなかではいかにも合点のゆかないことが生じたではなかったか！　目を閉じるとい

う単なる形式が、巨大な暗やみを決定してみせたのである。その暗やみは際限もなく拡がった深淵であった。誰しもこの深淵の深さや広さを言いあてることはできないであろう。

――どうか諸君に再びお願いがある。山椒魚がかかる常識に没頭することを軽蔑しないでいただきたい。牢獄の見張人といえども、よほど気難しい時でなくては、終身懲役の囚人が徒らに嘆息をもらしたからといって叱りつけはしない。

「ああ寒いほど独りぼっちだ！」

注意深い心の持主であるならば、山椒魚のすすり泣きの声が岩屋の外にもれているのを聞きのがしはしなかったであろう。

悲嘆にくれているものを、いつまでもその状態に置いとくのは、よしわるしである。山椒魚はよくない性質を帯びて来たらしかった。そして或る日のこと、岩屋の窓からまぎれこんだ一ぴきの蛙を外に出ることができないようにした。蛙は山椒魚の頭が岩屋の窓にコロップの栓となったので、狼狽のあまり岩壁によじのぼり、天井にとびついて銭苔の鱗にすがりついた。この蛙というのは淀みの水底から水面に、水面から水底に、勢いよく往来して山椒魚を羨しがらせたところの蛙である。誤って滑り落ちれば、そこには山椒魚の悪党が待っている。

山椒魚は相手の動物を、自分と同じ状態に置くことのできるのが痛快であったのだ。

「一生涯ここに閉じ込めてやる！」

悪党の呪い言葉は或る期間だけでも効験がある。蛙は注意深い足どりで凹みにはいった。そして彼は、これで大丈夫だと信じたので、凹みから顔だけ現わして次のように言った。

「俺は平気だ！」

「出て来い！」

山椒魚は呶鳴(どな)った。そうして彼等は激しい口論をはじめたのである。

「出て行こうと行くまいと、こちらの勝手だ」

「よろしい、いつまでも勝手にしてろ」

「お前は莫迦だ」

「お前は莫迦だ」

彼等はかかる言葉を幾度となくくり返した。翌日も、その翌日も、同じ言葉で自分を主張し通していたわけである。

一年の月日が過ぎた。

初夏の水や温度は、岩屋の囚人達をして鉱物から生物に蘇らせた。そこで二個の生物は、今年の夏いっぱいを次のように口論しつづけたのである。山椒魚は岩屋の外に出て行くべく頭が肥大しすぎていたことを、すでに相手に見ぬかれてしまっていたらしい。

「お前こそ頭がつかえてそこから出て行けないだろう？」

「お前だって、そこから出ては来れまい」

「それならば、お前から出て行ってみろ」

「お前こそ、そこから降りて来い」

更に一年の月日が過ぎた。二個の鉱物は、再び二個の生物に変化した。けれど彼等は、今年の夏はお互いに黙り込んで、そしてお互いに自分の嘆息が相手に聞えないように注意していたのである。

ところが山椒魚よりも先に、岩の凹みの相手は、不注意にも深い嘆息をもらしてしまった。それは「あああ」という最も小さな風の音であった。去年と同じく、しきりに杉苔の花粉の散る光景が彼の嘆息を唆したのである。

山椒魚がこれを聞きのがす道理はなかった。彼は上の方を見上げ、且つ友情を瞳に罩めてたずねた。

「お前は、さっき大きな息をしたろう？」

相手は自分を鞭撻して答えた。

「それがどうした？」

「そんな返辞をするな。もう、そこから降りて来てもよろしい」

「空腹で動けない」

「それでは、もう駄目なようか？」

相手は答えた。

「もう駄目なようだ」

よほど暫くしてから山椒魚はたずねた。

「お前は今どういうことを考えているようなのだろうか？」

相手は極めて遠慮がちに答えた。

「今でもべつにお前のことをおこってはいないんだ」

（大正十二年）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com